

Title	西王母譚の展開：『唐物語』第十六話をめぐって
Sub Title	The development of the tale of Xi Wangmu (西王母) : regarding the 16th episode of "Kara-monogatari (唐物語)"
Author	山田, 尚子(Yamada, Naoko)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.2 (2018.) ,p.122- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20180331-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西王母譚の展開

—『唐物語』第十六話をめぐって—

山田尚子

はじめに

『唐物語』は、全二十七話の物語から成る短編物語集である。個々の物語はいずれも中国故事に材を取る一方（第九話、第二十七話の二話は出典不明）、和文をもって記述され、作者の感懐や作中人物の心情などを詠み込んだ、一首あるいはそれ以上の和歌を含む。作者は、藤原成範（一一三五―八七）である可能性が高いとされ、平安末期成立であることが推定されている¹⁾。

中国故事は、自国の故事ではないものの、古来中国からさまざまな文物を受容してきた日本人にとって、漢詩文の作成や物事の発想において拠りどころとなる重要な知識であった。平安末期ともなれば、故事のうちには、文人を中心とした一定の教養を持つ日本人にとって馴染み深いものがかかり多くあったことだろう。とはいうものの、『唐物語』に収載される物語と、その原話である中国故事とを比較したときに浮き彫りになる両者の差異からは、中国故事に反映される中国の発想と、それを翻案し和様化した日本人の発想との間の明らかな違いを見て取ることができる。そして、さらにその一方で、平安末期は武士の台頭から鎌倉幕府成立へと展開する、いわば時代の転換点にあたり、それまでの価値観が大きく揺らいでいたことが推測される。中国故事が当時の日本人の発想や行動の拠りどころであったからには、こうした時代の有り様は、故事に対する人々の態度に何らかの変容をもたらすものではなかったか。『唐物語』の撰者と推される成範の父信西は、後白河上皇を諫めるという政治的意図をもって「長恨歌絵」を作成した。

「長恨歌」に描かれる楊貴妃譚一つとつても、それに対する見方、扱い方は、平安期のままではありえなかったのではないか。

本稿では、『唐物語』第十六話の西王母来訪譚(西王母が漢の武帝のもとを訪れる話)を取り上げ、故事としての西王母来訪譚が翻案され、展開するその様相について、具体的に考察したい。

一、第十六話の本文とその出典

先述のように、『唐物語』第十六話は、西王母が漢の武帝のもとを訪れる話(以下、西王母来訪譚と呼ぶ)である。最初に、やや長文であるが、第十六話の全文を掲げておく(本文は、寛政五年の賀茂季鷹校合識語を持つ名古屋大学文学部国語国文学研究室蔵本(影印)に拠る。なお、仮名表記を適宜漢字表記に改め、その際、もとの仮名表記をルビ(平仮名)に残した。ただし「御門」「帝」「みかど」の表記は「帝」に統一した。片仮名のルビは底本にあるルビをそのまま記したものである。また、送り仮名、仮名遣いなどを訂した)。

むかし、同じ帝、誰とは申しながら、限りなくこの世を惜しみ、命ながらへんことを願ひ給ひけり。まぼろしときこゆる仙人におほせて、蓬萊不死の薬とりにつかはしつづ、はかなき御あそび、たはぶれにも、この世にながらへておはせんことをぞ、いとなみ給ひける。

おほよそ人の好み願ふことは、必ずむなしからねば、この御時、東方朔といふ人、仙宮より罪ををかして、しばらく人間に下されたりけるを、帝、間近く召し使ひて、よろづおぼつかなくおぼされけることをば、まづこの人にぞ問はせ給ひける。

かかるほどに、宮のうちには、①色黄なる雀の例の色にも似ずあやしきさましたる、飛びあそびけるを、帝、「日ごろかかる鳥見えず。いかなることにか」と問ひ給ふに、東方朔、申していはく、「君、長生不死の道を好み給ふにより、御心にめでて、西王母と申す仙女、参りてあそびたてまつらん、と告げ知らする由の使ひなり」と聞こえさするに、帝、嬉しくおぼさるること限りなし。「いかなる有り様にて、その人を待つべきぞ」とのたまはする

に、「宮のうち静かにて、庭の面を浄め、香をたき、さまざまの床を設け給ふべし」と申しけり。」(以上、第一段)

かくて、たのめしほどにもなりぬれば、帝、御心すみやきつつ、床のもとに、東方朔をかくし置きて、人知れず、「今や、今や」と待たせ給ふに、②秋八月ばかり、月の光くまなき夜、香ばしき風うち吹きて、晴の空のどかなるに、紫の雲一群たなびきけり。その中より、この世ならず目もあやなる人、百人ばかり降り下れり。そのうち主とおぼしき人、帝に会ひたてまつりて、さまざまのことも聞こえさす。

やや久しくなるほどに、この人、桃七を取り出だして、その三をば帝にたてまつらせ給へり。これを御口に触れ給ひけるより、御身も軽く御心地もすずしくならせ給ひて、空にも飛びのほりぬべく、生死、罪障も解けぬべくやおぼしけん、「この桃、我が園にうつし植ゑて種をもとりてしがな」とのたまひけるに、西王母うち笑ひて、「天上の木の実の、人間にとどまり難くや」となん、いふにも足らずげにおほせり。

③また、「不死の薬や侍る」と尋ねさせ給ふにも、「生老病死の下界にむまれ給ひながら、いかでか不死の薬をもとめさせ給ふべき。はかなき御心なり」と聞こえさす。西王母のみにあらず、かひなき愚かなる心にも、むかし賢きひじりの帝の御ことばとおほえす。

かくて、しばしばかりあるに、上元夫人に雲環の瑟打たせて、挙妃瓊と聞こゆる仙人舞ひけり。玉の簪を動かし、錦の袖を翻す有り様、廻れる雪にことならず。帝、これを見給ふに、おもほえず御袖濡れにけり。この世の樂の声は物の数ならずおぼえ給ひけるより、御心もいたくあくがれぬ。」(以上、第二段)

夜、やうやう明け方になるほどに、「その御床の下にかくれ居て侍りける東方朔は、仙宮の人なり。しかも、かの三千年に一度なる桃を三度まで盗める罪によりて、しばらく人間に下されたる。咎を贖ひて後は、また天上に返り來たるべきなり」とのたまひて、紫の雲立ち返りぬ。

紫の雲立ち返りゆきしより心は空にあくがれにけり
この後は、いとど御心も空にあくがれて、いよいよ仙を願ひ給ひけり。

④唐国のならひにて、賢き帝には仙人なども皆使はれたてまつるにこそ。はかなくならせ給ひて後も、御身は

とどませ給はざりけるとかや。」(以上、第三段)

以上のように第十六話は三段に分割することができる。さらに、それぞれの内容を以下のようにまとめておく。

第一段：西王母が武帝のもとを訪れる、その前触れ。

第二段：西王母の到着と武帝とのやり取り。

第三段：西王母の帰還と、武帝のその後。

文化六年(一八〇九)に成った清水浜臣『唐物語提要』は、第十六話の出典として『漢武内伝(漢武帝内伝)』と『列仙伝』とを掲げる。ただし、前漢の劉向撰とされる『列仙伝』(『道藏』、『古今逸史』などに収められる)には、東方朔伝は見えるものの、西王母来訪譚は見えない。恐らく、『提要』のいう『列仙伝』は、明の汪雲鵬の編纂とされる『有象列仙全伝』ではないかと推定される。『有象列仙全伝』は、慶安三年(一六五〇)、寛政三年(一七九一)と、二度に渡って和刻本が刊行され、かなり広く流布したものと考えられる。この書には西王母の伝が載り、その中に、簡略ではあるものの、西王母来訪譚が記述されている。また、浅井峯治『唐物語新釈』(昭和十五年(一九三〇)発行)は、第十六話の出典として『博物志』を掲げる。

一方、枋尾武氏は、西王母来訪譚を載せる漢籍として『漢武故事』、『漢武帝内伝』、『博物志』を掲げ、第十六話とこれらの文献の記述との関係を詳細に分析している。枋尾氏の分析によって明らかなのは、現行の『漢武故事』、『漢武帝内伝』、『博物志』に拠る限り、それぞれが部分的に第十六話と一致する箇所を持ち、該話の出典をこのうちのいずれか一つに絞ることはできないということである。しかも第十六話には、これら三つの文献のいずれにも見えない記述、あるいはいずれにも一致しない記述がある。枋尾氏は、現行の三つの文献がもとの姿をとどめていないことを重視し、その上で現行のテキストから判断するなら「漢武故事を中心に漢武帝内伝を参照しながら書いたことになる」と考察し、さらに、もしそれぞれの文献の原形あるいは原形に近い本文が用いられたとするならば、それは『漢武帝内伝』だったのではないかと推定している。

『漢武故事』、『漢武帝内伝』は前漢の班固の撰、『博物志』は魏晋の張華の撰とされるが、現行のテキストはいずれ

ももとのままでなく、多かれ少なかれ後人の手が加わった可能性がある^①。従って、朽尾氏の指摘するように、現行の文献に見えないからといって、もとの文献になかったと断定することはできないし、逆に、現行の文献にあるからといって、もとの文献にもあったと断定することはできない。ただし、概して『唐物語』中の物語は、もともなかった故事の記事との間に看過しがたい相違を持ち、和歌や物語など日本の文献に拠って作られた表現も多く、そうした表現の多くは複数の文献の表現を重ね合わせた重層的な様相を持つ^⑤。従って本稿では、そうした重層性を重視し、出典以外の文献との関わりについて考えることにしたい。また、『唐物語』中の物語は、もとの中国故事の記述すべてを和文化的するのではなく、もとの記述をいわば取捨選択しながら翻案して作られているのであって、なぜその記述が選ばれたのか、撰者の選択の意図するところを文脈全体に照らして考えてみる必要がある。

本稿では、第十六話のうち、上掲の本文の傍線部①～④の箇所を中心に考察を加えたい。後述するように、これらの箇所はいずれも、出典だと想定される『漢武故事』、『漢武帝内伝』、『博物志』には見えない記述、あるいはいずれにも一致しない記述を含んでいる。

二、「色黄なる雀」について

最初に、傍線部①の「色黄なる雀の色にも似ずあやしきさましたる、飛びあそびける」を取り上げたい。

しばしば指摘されるように、西王母来訪譚において、西王母の使者として武帝のもとを訪れる鳥は「青鳥」であつて「色黄なる雀」ではない^⑥。以下に掲げるのは、『博物志』および『漢武故事』の記述である。

○七月七日夜漏七刻、王母乘紫雲車而至於殿西、南面東向、頭上戴七種、青氣鬱鬱如雲。有三青鳥、如鳥大、使侍母旁。(七月七日夜漏七刻、王母紫雲車に乗りて殿の西に至る、南面東向し、頭上に七種を戴き、青氣鬱鬱として雲の如し。三青鳥有り、鳥の大なるが如く、母の旁らに侍らしむ。)

○七月七日、上於承華殿齋、正中、忽有一青鳥、從西方來集殿前、上問東方朔。朔曰、此西王母欲來也。有頃、王母至、有二青鳥如鳥。挾侍王母旁。(七月七日、上承華殿に於て齋し、正中、忽ちに一青鳥有り、西方より

(『博物志』卷八)

来たりて殿の前に集まり。上 東方朔に問ふ。朔曰はく、此れ西王母の来たらんと欲すと。頃く有りて、王母
至り、二青鳥有りて鳥の如し。挟みて王母の旁らに侍り。

〔『藝文類聚』鳥部中「青鳥」所引『漢武故事』

西王母来訪譚は、日本において古くから故事として知られ、就中西王母の使者が「青鳥」であるというのにもまたよく知られた事柄であった。早く『懷風藻』収載の藤原房前の「七夕」詩(85)には「欲知神仙会、青鳥入瓊楼(神仙の会を知らんとすれば、青鳥の瓊楼に入るを)」とあり、この句の表現は明らかに西王母来訪譚を踏まえる。また、源為憲の『世俗諺文』は、寛弘四年(一〇〇七)の自序により、十六才の藤原頼通に向けて作られたことが知られるもので、巷間の俗諺や慣用句(諺文)を一つ一つ掲げ、それぞれの諺文について注文を付けてその出典を示す、いわば漢語ことわざ辞典のごとき体裁の書と考えられるが、中に諺文として「青鳥使(青鳥の使ひ)」を掲げ、その注文に『漢武故事』を引く。この注文に引かれる『漢武故事』の本文は、前掲の『藝文類聚』「青鳥」項所引の本文との間に細かな異同はあるものの、両者の元になった記述はほぼ同文であったことが認め得る。以上のことから、平安期を通じて、西王母来訪譚を典拠とした「青鳥」の語が、広く浸透して用いられていたことが窺われる。さらに、『奥義抄』や朗詠注などに引かれる西王母譚においても、西王母の使者となつてやつてくる鳥は「青鳥」であり、「色黄なる雀」に類するものは管見に入らない。

『唐物語』第十六話が「色黄なる雀」とした背景には何があるのか。ここで取り上げたいのは、黄雀をめぐる以下の逸話である。

統齊諸記曰、宝年九歳時、至華陰山北、見一黄雀為鴟梟所搏、墜於樹下、為螻蟻所困。宝取之以歸、置巾箱中、唯食黄花。百餘日毛羽成、乃飛去。其夜有黄衣童子。向宝再拜曰、我西王母使者、君仁愛救拯、実感成済。以白環四枚与宝、令君子孫潔白、位登三事、当如此環矣。(統齊諸記に曰はく、宝年九歳の時、華陰山の北に至り、一黄雀の鴟梟の搏つ所と為り、樹下に墜ち、螻蟻の困しむ所と為るを見る。宝之れを取りて以て歸り、巾箱の中に置き、唯だ黄花を食らはしむ。百餘日にして毛羽成り、乃ち飛び去る。其の夜黄衣の童子有り。宝に向ひて再拜して曰はく、我れは西王母の使者なり、君仁愛にして救拯す、実に成済を感ず、と。白環四枚を以つて宝に与

へ、君の子孫をして潔白にして、位三事に登らしむる、当に此の環の如くなるべし、と。」

〔後漢書〕楊震列伝、李賢注所引

本話は、楊宝（楊震の父）に助けられた黄雀がやがてその恩に報いる、いわゆる動物報恩譚である。注目したいのは、傍線部分のように、黄衣の童子に姿を変えた黄雀が、自ら「西王母使者」と名乗る点である。従って、『唐物語』第十六話の「色黄なる雀」は、この楊宝譚に従って、本来の「青鳥」が「黄雀」へと作り変えられたものではないかとの推定が成り立つ。

一方、本話については、『蒙求』にも「楊宝黄雀、毛宝白亀」の句があり、その注には前掲と同様の楊宝譚が引かれる。『蒙求』は、天宝五年（七四六）頃、李瀚によって編纂された幼学書で、それぞれに故事を詠み込んだ五百九十餘の四字句から成る。現存の故宮博物院蔵本、真福寺蔵本の注は李瀚の自注だと想定され、日本においても平安期を通じて次第に幼学書として定着していったものと考えられる。池田利夫氏は、『蒙求』と『唐物語』との関係を想定し、「蒙求を直接の典拠としなかった場合も箇々にはあるとしても、蒙求によって知った話、それによって一層名高い話が唐物語に取り上げられている、と考えるのは自然であろう」と述べている⁸⁾。

ただし、「楊宝黄雀」の句に付された李瀚自注が引く楊宝譚は『搜神記』所載のもので、前掲李賢注所引の『統齊諧記』の記事とは少なからぬ違いを含む。就中、本稿の問題意識に照らして問題となるのは、李瀚自注には西王母への言及が見えないという点である。以下に該当箇所を掲出する。

後漢楊宝、年七歲行於華山中、見一黄雀被瘡為螻蟻所損。宝見而憐之、因將婦置杖於箱中、採黄花蕊而飼之。経十餘日瘡愈、旦去暮来。忽一朝變為黄衣年少、持玉環二双、報宝曰、好掌此子孫累世三公。宝生震、漢明帝為大尉。震生康、漢和帝為大尉、康生賜、漢明帝為司徒。賜生彪、漢靈帝為司空。出搜神記。華陰人也。（後漢の楊宝、年七歳にして華山の中を行くに、一黄雀の瘡せられて螻蟻の損なふ所と為るを見る。宝見て之れを憐れみ、因りて將^子けて歸りて箱の中に置き、黄花の蕊を採りて之れを飼ふ。十餘日を経て瘡愈え、旦に去りて暮に来たる。忽ち一朝變じて黄衣の年少と為り、玉環二双を持ちて、宝に報ひて曰はく、好く此の子孫累世の三公たるを掌らん。宝震を生み、漢の明帝のとき大尉たり。震康を生み、漢の和帝のとき大尉たり、康賜を生み、漢の明帝の

とき司徒たり。賜彪を生み、漢の靈帝のとき司空たる。搜神記に出づ。華陰の人なり。

(故宮博物院藏『蒙求』「楊宝黄雀」261李瀚自注)

すなわち、楊宝黄雀譚には『統齊諧記』に載るものと、『搜神記』に載るものとの二系統の記事があったことが知られる。⁹⁾『蒙求』「楊宝黄雀」の李瀚自注に引かれる『搜神記』の記事には黄雀の化した黄衣の童子が西王母の使者と名乗るといふ記述は見えないが、『統齊諧記』の記事にはそれが見える。また、『藝文類聚』鳥部下「雀」、『太平御覽』人事部「陰德」、同人事部「報恩」、同羽族部「黄雀」に引かれる楊宝譚は、いずれも『統齊諧記』を引く。

こうした状況からすれば、平安期において、『蒙求』の李瀚自注に引かれる楊宝黄雀譚が広く知られる一方で、そればかりではなく、二つの所伝のいずれもが広く浸透していたと考えてよいのではないか。さらにここでは、その証左として、『蒙求和歌』の注の記述に注目したい。

楊宝黄雀 露

後漢ノ楊宝、七歳ニシテ花山ノ内ニ行キテ、一ノ黄ナル雀キズヲカブリテ、アリニツカマレタルヲミル。楊宝アハレミテ、トリテ家ニカヘリス。ハコノナカニ入レテカフ。五穀ヲ食ラハズ、黄花ノ蕊ヲトリテカヒヤシナイテ、十日ヲスギテキズイエニケリ。アシタニサリテ、ヨハニキタリテ、ハコノソコニトマルコトヤヤヒサシ。後ニ変ジテ黄衣少年ノ人トナリテ、白環一雙ヲモチテカタリテ、楊宝ニアタヘテ云ハク、コノタマヲタクハヘテ、ナム子孫ヲカサネテ三公トナルベシト云ヒテサリス。後ニタガフコトナシ。統齊諧記云、黄衣ノ童子、楊宝ニムカヒテ画拜シテ云ハク、我ハ西王母ガツカヒナリ。キミガ仁愛、白環四枚ヲアタフルトコロナリ、ト云ヘリ。

ワガカドノワサダノスズメタツアトノイナバニオケルツユノシラタマ

(『蒙求和歌』秋部43)

『蒙求和歌』は、源光行(一一六三—一二四四)が『蒙求』の五百九十餘句の約半数を選んで春・夏・秋・冬・恋・祝・羈旅・閑居・懷旧・述懷・哀傷・管絃・酒・雜の十四の部立に分類し、それぞれの句に仮名注と句題和歌一首を付したもので、序文によれば元久元年(一一〇四)の成立である。当時光行は鎌倉にあり、十三歳の将軍源実朝に献上するための幼学書として編纂された可能性が指摘されている。光行が『蒙求和歌』の仮名注製作に際して主に参照したのは、『蒙求』の最古注である李瀚自注であったと考えられる。しかしながら、『蒙求和歌』の仮名注が現存の李

瀚自注と全く一致するかといえはそうではなく、両者の間にはしばしば記事の相違がある¹⁰。

『蒙求和歌』の「楊宝黄雀」の注は、「七歳ニシテ花山ノ内ニ行キテ」とあるのをはじめ、主として李瀚自注に拠って作られていることが確認できる（「黄雀」は「一ノ黄ナル雀」とされる）。ところが、傍線部分以降は、李瀚自注にはない『続齊諧記』の本文を引き、黄衣の童子（＝黄雀）が西王母の使者であることを記している。この場合、『続齊諧記』の部分を『蒙求』以外の文献から光行自身が補ったものか、あるいは光行が見た『蒙求』の欄上や行間に注として『続齊諧記』の記事が書き入れられていたものか、いずれの可能性も想定し得る。ただし、いずれにしても、光行が、当時伝えられていた楊宝黄雀譚のうち、李瀚自注の記事だけでは足りない部分、すなわち黄雀が西王母の使者であるという部分を『続齊諧記』の記事によって補ったという点は疑いがないものと考えられる。

さて、改めて『唐物語』第十六話の「色黄なる雀」に戻れば、既に述べたように、『続齊諧記』の楊宝黄雀譚に従って本来の「青鳥」を「色黄なる雀（＝黄雀）」に作り変えた、という推定が可能だと考える。そこで、ここに至ってさらなる問題は、なぜ「青鳥」が「黄雀」にされたのか、という点であろう。これについては、次節の考察の後、改めて考えることにしたい。

三、『竹取物語』との関わり

ここで再び第一節に掲出した『唐物語』第十六話の本文に戻りたい。次に取り上げたいのは傍線部②の箇所である。改めて傍線部②を掲出する（新たに傍線(a)～(d)を付す）。

(a) 秋八月ばかり、月の光くまなき夜、香ばしき風うち吹きて、晴の空のどかなるに、紫の雲一群たなびきけり。
 その中より、(b)この世ならず目もあやなる人、(c)百人ばかり降り下れり。(d)そのうちに主とおぼしき人、帝に会ひたてまつりて、さまざまのことも聞こえさす。

傍線部(a)のように、『唐物語』第十六話においては、西王母が武帝のもとへやって来るのを「秋八月ばかり、月の光くまなき夜」、すなわち八月十五日中秋の夜とする。ところが、よく知られるように、前節に掲出した『博物志』、

『漢武故事』のほか、『漢武帝内伝』も同様に、これらに記載される西王母来訪譚では、西王母の来訪は七月七日である。また、これらの漢籍のうち、天から西王母が降る場面を最も詳細に記すのは『漢武帝内伝』であるが、その場面の模様もまた、第十六話とは異なっている。以下にその場面を掲出する。

二唱之後、忽天西南如白雲起、鬱然直来、徑趨宮庭間、須臾転近、聞雲中有簫鼓之声、人馬之響。復半食頃王母至也。果投殿前、有似鳥集。或駕龍虎、或乘獅子、或御白虎、或騎白麟、或控白鶴、或乘軒車、或乘天馬、群仙数万、光耀庭宇。(二唱の後、忽ちに天の西南に白雲の如きもの起り、鬱然として直ちに来たり、徑ちに宮庭の間を趨り、須臾にして転た近づきて、雲中に簫鼓の聲、人馬の響き有るを聞く。復た半は食頃にして王母至るなり。果けて殿の前に投じ、鳥の集まるに似たること有り。或は龍虎に駕し、或は獅子に乗り、或は白虎を御し、或は白麟に騎し、或は白鶴を控へ、或は軒車に乗り、或は天馬に乗り、群仙数万、光庭宇を耀かす。)

(『漢武帝内伝』)

『唐物語』第十六話は、なぜ西王母の来訪を八月十五夜のこととしたのだろう。そのときの模様をなぜ前掲のように記述したのだろうか。

結論からいってそれは、第十六話のこの箇所が『竹取物語』に拠って書かれたからだと考えられる。『竹取物語』では、月の都からかぐや姫を迎えに天人たちが下ってくるのが八月十五日、中秋の夜である。その場面を以下に掲げる。かかるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明かさにも過ぎて、光りたり。望月の明かさを十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて降り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち列ねたり(中略)立てる人どもは、装束のきよらなること、ものにも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおほしき人、家に、「造麻呂、まうで来」と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、ものに酔ひたる心地して、うつ伏しに伏せり。

(『竹取物語』)

このうち、特に傍線部分の「その中に王とおほしき人」の表現は、前掲『唐物語』第十六話の傍線部(d)の「そのうちに主とおほしき人」の表現に酷似する。また、この表現に続いて「王とおほしき人」と「主とおほしき人」とがそれぞれ、前者は造麻呂に、後者は武帝に、一方的に話をするという展開も共通する。

また、『竹取物語』において、羽衣を着て天女(仙女)となったかぐや姫が天上へと帰っていく場面には「この衣着つる人は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ」とある。前掲『唐物語』第十六話の傍線部(c)「百人ばかり降り下れり」は、『竹取物語』のこの記述に基づき、「百人ばかり」としたものと推定される。

そもそも『竹取物語』は中国の神仙譚の影響を強く受けて成った作品とされ、特に『漢武帝内伝』は、その粉本ともされる。渡辺秀夫氏は、『漢武帝内伝』と『竹取物語』との関係について、「内伝」を仙伝の典型の一つとして捉え、これを『竹取物語』と対照したとき、そこに少なからぬ神仙譚的モチーフの類同を見いだしようように思う」と述べ、両者の構成上の類似点の一つとして、『漢武帝内伝』の西王母と『竹取物語』の天人たちとがいずれも光彩に満ちた中を地上へ降ってくることを挙げてゐる¹³⁾。

西王母来訪譚に『竹取物語』の表現が織り込まれることで、読者は、西王母来訪譚と『竹取物語』とを重ね合わせることになる。『唐物語』第十六話の表現は、西王母来訪譚から『竹取物語』へ、さらに『竹取物語』から西王母来訪譚へと読者の連想が働くように巧まれたものと考えられる。

さらに、傍線部(b)の「目もあやなる(目もあやなり)」という表現は、『竹取物語』には見えないけれども、『源氏物語』「手習」の一節で、『竹取物語』を意識的に取り込んで作られている場面に見える。

夢のやうなる人を見たてまつるかなと尼君はよろこびて、せめて起こし据ゑつつ、御髪手づから梳りたまふ。さばかりあさましう引き結びてうちやりたれつれど、いたうも乱れず、ときはたれば艶々とけうらなり。一年たらぬつくも髪多かる所にて、目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむやふに思ふも、あやふき心地すれど、

(『源氏物語』「手習」)

薫と匂宮との板挟みに苦しんだ浮舟が入水自殺をはかったのち、横川僧都に助けられ、僧都の妹尼(尼君)に手厚く看護される場面。尼君が浮舟の髪をときながら、浮舟のことをまるで天女のようにだと感じる件りである。掲出箇所少し後で、浮舟に対する尼君の心情が「かくや姫を見つけ見つけたりけん竹取の翁よりもめづらしき心地するに、いかなるもののひまに消え失せんとすらむと、静心なくぞおほしける」と描かれることから、この場面全体が『竹取物

語」を踏まえ、浮舟をかぐや姫に見立てて表現が作られていると考えられる。従って、掲出箇所「目もあやに、いみじき天人の天降あまくだれるを見たらむやふに思ふも、あやふき心地すれど（＝目にもまばゆいくらい、素晴らしい天女が天降って来たのを見ているように思うにつけても、やがて天に帰ってしまうのではないかと不安な気持ちになるけれど）」とあるうちの「目もあやに（目もあやなり）」は、『竹取物語』には見えない表現ではあるものの、この表現を用いた『源氏物語』を通じて、『竹取物語』の文脈を連想できる表現となつていよう。

前述のように、『唐物語』が先行作品に依拠した表現や構成を用い、『唐物語』中の物語と先行作品とが重ね合わせて表現される重層的な物語世界を作っている点については、いくつかの物語をめぐって既に指摘がある。ここでは、第十六話の西王母来訪譚が『竹取物語』と重ねられて作られていることを確認しておきたい。

四、「月」への志向

ここで改めて『唐物語』第十六話の西王母来訪譚を見れば、西王母が武帝のもとへと降るのが八月十五日である点を含め、この物語が『竹取物語』と重ねて作られていることからして、西王母を月から降る存在として描こうとする意図を窺うことができる。そして、第一節において考察した「色黄なる雀」もまた、この意図に即して作られたのではないかと推測される。ただし、本来の「青鳥」が「色黄なる雀（＝黄雀）」に作り変えられた、より直接的な要因は、むしろ「青鳥」の側にあつたのではないかと考えられる。というのも、司馬相如の「大人賦」（『史記』司馬相如伝所引）およびその注（正義）に以下のようにあるからである。

吾乃今日睹西王母矐然白首。載勝而穴処兮、亦幸有三足鳥為之使。〔正義〕三足鳥、青鳥也。主為西王母取食。在昆墟之北。（吾れ乃ち今日に西王母を睹れば矐然にして白首なり。勝を載きて穴処す、亦た幸ひに三足鳥有りて之れが為に使ひす。〔正義〕三足の鳥とは、青鳥なり。西王母の為に食を取るを主る。昆墟の北に在り。）

（『史記』司馬相如伝）

これによれば、西王母の使者である「青鳥」は、「三足鳥（三本足の鳥）」に同じということになる。一方、よく知

られるように、「三足鳥」は太陽に住む。

○孔子曰、神亀知吉凶、而骨直空枯。日為徳而君於天下、辱於三足之鳥。月為刑而相佐、見食於蝦蟇。(孔子曰はく、神亀は吉凶を知れども、而も骨は直だ空しく枯る。日は徳たりて天下に君たれども、三足の鳥に辱めらる。月は刑たりて相ひ佐くれども、蝦蟇に食せらる。)

○義和仮道於峻岐、陽鳥廻翼乎高標。(李善注)春秋元命苞曰、陽成於三、故日中有三足鳥。鳥者陽精。(義和道を峻岐に仮り、陽鳥翼を高標に廻らす。〔李善注〕春秋元命苞に曰はく、陽は三に成る、故に日中に三足の鳥有り。鳥は陽精なり。)

〔青鳥〕が「三足鳥」であるなら、それは太陽に住む鳥だということになる。このことは、『唐物語』第十六話が意図する「月から降る西王母」の造型との間に齟齬を来たす。西王母が月から降るからには、その前触れとしてやつて来る王母の使者もまた、月に住む鳥であつたほうがよい。百歩譲つて月に住む鳥ではないにせよ、少なくとも太陽に住む鳥ではないほうがよい。『唐物語』の撰者は、そのように考えて「青鳥」を「黄雀」に作り変えたのではないか。そして、「青鳥」から「黄雀」への作り変えの根拠をこのように想定したとき、西王母の居所である仙界を「月」に設定しようとする『唐物語』撰者の意向が、かなり強いものであつたことが改めて推測されよう。

『唐物語』において、中国故事が日本の物語へと作り直されるにあたって、日本的な情趣を演出し、平安朝的な世界を構築するのに効果的な方法として「月」の描出があることは、これまでにもしばしば取り上げられてきた。

例えば、第一話の王徽之(字は子猷)の話は、『晋書』王徽之伝や『世説新語』任誕篇、『蒙求』「子猷尋戴(176)」注などに見えるが、これら漢籍の記述においては、王徽之が左思「招隱詩」を口ずさんで戴逵(字は安道)に会いに行くきっかけとして、王徽之のいる周囲の情景を「夜雪初霽、月色清明、四望皓然(夜の雪初めて霽れ、月色清明として、四望皓然たり)」(『晋書』王徽之伝)と記すに過ぎない。一方、『唐物語』第一話においては、作品の冒頭で王徽之について「世中のわたらひにほだされずして、ただ春の花、秋の月にのみ心をすましつ」と紹介し、王徽之が戴逵(『唐物語』の表記は戴安陶)のところへと出かけるきっかけは「月の光清くすさまじき夜、一人起きあてなぐさめがたくやおぼえけん」と説明する(ただし、掲出箇所の前に「かきくもり降る雪はじめて晴れ」とある本もある)。

また、戴逵の家の門まで行つて興尽きて帰つたことについては、「道の程はるかにて、夜も明け月もかたぶきぬるを、本意ならずやおぼえけん」と説明し、王徽之が詠んだ歌として「もろともに月見んとこそ急ぎつれ必ず人にはあはむものかは（＝一緒に月を見ようと思つたからこそ急いで来たのだ。必ずしも彼に会おうと思つたわけではない）」を挙げ、すなわち、ここでは、王徽之の興趣が「月」によって発するものとして捉え直されているのである。

このほか、第二話の白居易が女の琵琶を聞く話（出典は『白氏文集』卷十二「琵琶引并序」、第五話の司馬相如の出世譚、第八話の昝々の話（出典は『白氏文集』卷十五「燕子三首并序」、第十一話の蕭史（『唐物語』の表記は蕭史）と弄玉の昇仙譚、第十四話の陵園の妾の話（出典は『白氏文集』卷四、新樂府「陵園妾」、第十七話の商山四皓と呂后と戚夫人をめぐる話、第十八話の玄宗楊貴妃譚（出典は『白氏文集』卷十二「長恨歌并序」）には、いずれも「月」が描出される。これらの物語には、出典の記述に「月」が登場するものもあればしないものもあるけれども、それぞれの物語における「月」の扱い方（「月」という題材の持つ重要性）は、出典における「月」の扱い方をはるかに越える。各物語において「月」が描かれることによる効果、あるいは個々の「月」が担う機能はそれぞれ異なるだろうが、全体として、『唐物語』における「月」の描出には、撰者の「月」に対する特別な思い入れが存するものと考えられる。

第十六話の西王母来訪譚における「月」もまた、如上の他の物語における「月」と同様のものと考えることができ、ただし、第十六話の「月」については、その存在が『竹取物語』を前提としているという点で特徴的だといえよう。

五、「不死の薬」と東方朔——愛別離苦の情と賢帝像——

最後に、第一節に掲出した第十六話本文のうち、傍線部③、④に注目したい。まず、糸口として傍線部③について
 の考察から始めたい。改めて傍線部③を以下に掲げる（新たに傍線(e)・(f)を付す）。

(e)また、「不死の薬や侍る」と尋ねさせ給ふにも、「生老病死の下界にむまれ給ひながら、いかでか不死の薬をも

とめさせ給ふべき。はかなき御心なり」と聞こえさす。(f)西王母のみにあらず。かひなき愚かなる心にも、むかしかの賢かしきひじりの帝の御ことばとおほえず。

傍線部(e)では、武帝が西王母に「不死の薬」があるかどうかを尋ねると、西王母は、「生老病死の下界」に生まれた武帝が「不死の薬」を求めても、それは「はかなき御心(＝無意味な心持ち、無駄な希望)」だと答える。実は、傍線部(e)は、以下の『漢武帝内伝』の記述をもとにして作られたものと考えられるが、両者が意味するところは微妙に異なっている。

下車上迎拜、延母坐、請不死之薬。母曰「太上之薬、有中華紫蜜、雲山朱蜜、玉液金漿、其次薬有五雲之漿、風実云子、玄霜絳雪。上握蘭園之金精、下摘円丘之紫柰。帝滞情不遣、欲心尚多。不死之薬、未可致也。」(下車するに、上迎拜し、母を坐に延ひき、不死の薬を請ふ。母曰はく、太上の薬に、中華紫蜜、雲山朱蜜、玉液金漿有り、其れに次ぐ薬に五雲之漿、風実云子、玄霜絳雪有り、上は蘭園の金精を握り、下は円丘の紫柰を摘む。帝情を滞とらして遣らず、欲心尚ほ多し。不死の薬、未だ致すべからざるなり、と。)

『漢武帝内伝』によれば、武帝は西王母に「不死の薬」を求めたけれども、武帝が「滞情不遣、欲心尚多」であるために西王母としてはまだ渡せないという。一方、『唐物語』第十六話では、武帝の「不死の薬」への希求が「はかなき御心」であることについて、傍線部(f)でも「自分(＝『唐物語』撰者)のごとき、とるにたりない愚者の考えでも、昔の賢い帝の言葉とは思われない」と、撰者自身の意見を混じえながら、重ねて強調している。

そこで、傍線部(e)・(f)について、『竹取物語』に照らしてその意図するところを考えてみたい。『竹取物語』においては、いよいよかぐや姫が月の都へと帰るときが近づき、天人はかぐや姫に「不死の薬」を飲ませようと「壺なる薬たてまつれ。穢きたき所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」という。かぐや姫は天人に差し出された「不死の薬」を少し嘗かめただけでそれを残し、帝への文とその「不死の薬」とを帝に差し上げてから去って行く。その後、かぐや姫からの文を読んだ帝は、心痛のために食事もとらず管絃の遊びも止めてしまう。そして、駿河の山(富士の山)が最も天に近いと聞いて、そこへ使者を派遣し、「不死の薬」と(かぐや姫への)文を燃やすのである。この箇所は『竹取物語』の結びに当たる。以下に該当箇所を引く。

大臣、上達部を召して、「いずれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の国にあなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ

かの奉る不死の薬、御文、壺具して、御使に賜はす。勅使には、調石笠といふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂にて、持て着くべきよし、仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬ならべて、火をつけて燃やすべきよし、仰せ給ふ。そのよし承りて、士どもあまた具して、山に登りけるよりなむ、その山を「富士の山」と名づけける。その煙、いまだ雲の中へぞ立ち昇るとぞ、言ひ伝へたる。

（『竹取物語』）

掲出箇所にある「逢ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ（＝もうかぐや姫に逢うことも無くなってしまつて、流れる涙に浮かんでいるような私の身には不死の薬も何の役に立つものか）」の歌が端的に表すように、『竹取物語』の帝が「不死の薬」を燃やしてしまうのは、かぐや姫がいなくなつては「不死の薬」など意味がないためであつた。いわば、「不死の薬」の価値よりもかぐや姫を失つた悲しみのほうが勝つたのである。

翻つて『唐物語』第十六話の傍線部(e)の「はかなき御心」は、『竹取物語』の帝の歌にいう「死なぬ薬もなにかはせむ」に等しいだろう。それは、「生老病死の下界」にあつて、自分一人が「不死の薬」を手に入れたところで、大事な人々を失う悲しみに耐えながら生きるのは所詮不可能であること、従つて「不死の薬」を手に入れたところでそれは人間にとって無意味であること、をいうものだと考えられる。傍線部(f)の「むかしの賢きじりの帝の御ことばとおほえず」は、そうした無意味さを認識していない武帝に対する、撰者自身による批判だと考えることができる。『唐物語』撰者は、『竹取物語』の帝の「不死の薬」に対するあり方を人間本来のあり方とした上で、それに照らして武帝の「不死の薬」に対する態度（「不死」を希求する態度）を否定したものといえよう。『唐物語』の撰者が、総体として情的なもの（「なさけ」、「情」）を重視し、愛別離苦を主題の一つとしてしていることについては既に指摘がある¹⁷。そして『竹取物語』もまた、天上世界の非人間性と対峙させつつ、愛着や悲嘆という人間的な「もの思ひ」を描いた作品であつた¹⁸。人間の「情」とは、人間性そのものに等しい。第十六話の西王母譚においては、武帝の神仙への憧憬を描きつつ、そうした神仙的であり方が愛別離苦を中心とする人間の「情」（＝人間性そのもの）を乗り越える手段とはな

り得ないこと、愛別離苦がもたらす悲しみが「不死の薬」によって救われなことを提示していると考えられる。

以上のように第十六話においては、「不死の薬」に対する武帝の態度を否定する。ところがその一方で、第十六話の結びの評語（第一節掲出の第十六話本文の傍線部④）には「唐国（からくに）のならひにて、賢き帝（かし）には仙人なども皆使（みなつか）はれたてまつるにこそ」とあり、こちらでは東方朔との関係において武帝を高く評価している。『唐物語』撰者にとっては、東方朔のごとき仙人が仕えたことこそ、武帝が賢帝であることの指標となっているのである。また、第十六話の前半分には、既に東方朔について、「おほよそ人の好み願（ねが）ふことは、必ずむなしからねば、この御時、東方朔といふ人、仙宮より罪（つみ）をかして、しばらく人間に下（くだ）されたりけるを、帝、問（ま）近く召（め）し使（つか）ひて」という説明がある。つまり、神仙を希求するその願いの強さによって、武帝は東方朔を問近に置くことができたというのである。東方朔が武帝の臣下となったその理由はあくまで武帝の側にあるということであろう。東方朔は、天上世界で罪を犯して地上に降された、所謂謫仙であり、この点で『竹取物語』のかぐや姫と同様である。しかしながら、東方朔は帝にとって恋愛の対象ではなく、臣下である点でかぐや姫とは異なっている。第十六話は、武帝と西王母の物語である一方で、武帝と東方朔の物語、すなわち帝と臣下の物語としても作られているのである。そして、武帝と東方朔との関係を、より広く帝と臣下との関係という視点から捉え直してみれば、世に二人といない異才を臣下として掌中に納めることができた帝を、賢帝として称揚しようとする姿勢を示しているのではないかと考えられる。

さらに、ここで改めて注目したいのは、前掲の傍線部(f)「西王母のみにあらず。かひなき愚（おろ）かなる心にも、むかしの賢（かし）きひじりの帝の御ことばとおほえず」が、武帝に対する、撰者自身による批判となっている点である。こうした批判は、裏を返せば、賢帝がどうあるべきか、それを問題にしているものと考えられる。賢帝たるもの、「不死の薬」を求めることの無意味さ、人間の「情」からの逃れ難さを知っておくべき、という撰者の発想を暗に示すものと考えられる。

以上の考察によって、第十六話からは、『唐物語』撰者の賢帝像、すなわち、人間の「情」からの逃れ難さを知り、有能な臣下を持つ帝の姿、を窺うことができよう。

おわりに

本稿では、『唐物語』第十六話の西王母来訪譚を取り上げ、中国故事としての西王母来訪譚が、楊宝黄雀譚や『竹取物語』に拠って日本の物語へと翻案され、さらに帝と臣下の物語へと展開する様相を考察してきた。第十六話においては、西王母訪問の前触れである鳥は「黄雀」となり、西王母は八月十五日、中秋の夜に、「月」から武帝のもとへとやって来る。武帝は西王母に「不死の薬」を求め、病老不死の下界では、「不死」自体が無意味であると説かれ、その一方で、武帝は有能な臣下を持つという面ではやはり賢帝だと評価されている。こうした該話の有り様からは、西王母譚が極めて日本的な展開を遂げる、その具体相を顕著に窺うことができる。興味深いのは、この物語が西王母来訪譚の翻案で、翻案に際しては『竹取物語』が下敷きにされていながら、帝と臣下の物語としても成立しているという点である。

確かに『唐物語』は、その表現には全体として『源氏物語』や和歌などの影響が強く認められ、内容としても「情」や「なさけ」を積極的に描き、平安王朝的な情緒にそって作られた作品だといえることができる。ただしその一方で、そうした平安王朝的な情緒の背後に隠れ、なかなか表立って見えてくることはないものの、帝と臣下との関係、あるいは帝のあり方を問う作品としての側面もまた、持っているのではないか。帝の「情」や「なさけ」は、一方で帝としてのあり方と深く関わる事柄でもあろう。従来あまり注目されたことはないが、『唐物語』という作品全体を通じて、帝と臣下との関係、あるいは帝のあり方がどのように扱われているか、見直す必要がある。

本稿冒頭で言及したように、『唐物語』の撰者と推される成範の父信西は、後白河上皇を諫めるという政治的意図をもって「長恨歌絵」を作成し、結局のところ平治の乱で命を失い、成範もまた配流となった。『唐物語』の撰者が成範だとして、『唐物語』の帝をめぐる物語に、成範自身の思い、就中、帝という存在に対する見方が反映されていると考えるのは、穿ち過ぎであろうか。

使用テキスト

・『唐物語』：和泉書院影印叢刊　・博物志：古體小説叢刊（中華書局）　・『史記』後漢書：中華書局本　・故宮博物院藏『蒙求』：『蒙求古註集成』（汲古書院）　・『蒙求和歌』：新編国歌大観　・漢武帝内伝：錢熙祚校本（守山閣叢書所収）　・『竹取物語』：新潮日本古典集成（新潮社）　・『源氏物語』：新編日本古典文学全集（小学館）　・『文選』：足利学校藏宋刊明州本

注

- (1) 太田晶二郎『桑華書志』所載『古蹟歌書目録』（太田晶二郎著作集 二）吉川弘文館、一九九二年、初出は一九五四年十一月。吉田幸一『唐物語は平安時代の作品なり上・下』（平安時代史研究）第二十号・第二十一号、一九五七年九月・一九五八年六月。中村文『信西の息子達——成範・脩範・静賢・澄憲を中心に——』（和歌文学研究）第五十三号、一九八六年十月。田淵句美子『藤原成範小考——『唐物語』の和歌を中心に——』（人間文化研究年報）第十号、一九八七年三月）ほか。
- (2) 『有象列仙全伝』（慶安三年藤田庄右衛門刊）の「西王母」の項に「後漢元封元年降武帝殿、母進蟠桃七枚於帝、自食其二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一実耳」とある。
- (3) 枋尾武『唐物語の比較文学的研究稿』（一九六八年四月）。
- (4) 『日本国見在書目録』には、「十六旧事家」に「漢武帝故事二卷」、「甘雜伝家」に「漢武内伝二卷（葛洪撰）」、「卅雜家」に「博物志十（張華撰）」がそれぞれ著録される。なお、『藝文類聚』『初学記』『太平御覧』に西王母来訪譚が引かれる場合、管見の及ぶ限り『漢武帝内伝』か『漢武故事』かを出典とし、『博物志』を出典とするものは見えない。
- (5) 有吉恵美子『唐物語について——翻訳技巧を中心として——』（『香椎潟』第六号、一九六〇年七月）。小峯和明『唐物語小考』（『中世文学研究』第十二号、一九八六年八月）。猪熊範子『唐物語』における作中和歌の位相（『国文学研究』第一一七号、一九九五年十月）ほか。
- (6) 『漢武帝内伝』では、西王母の使者としてやって来るのは王子登という崑崙山の玉女である。「忽見一女子著青衣美麗非常。帝愕然問之。女对曰、我傭宮玉女、王子登也。向为王母所使從崑崙山来。」
- (7) 「青鳥」について、菅原道真には「臣通籍重門、踏綵霞而失歩、登仙半日、問青鳥而知音（臣籍を重門に通じ、綵霞を踏んで歩を失ふ、仙に登ること半日、青鳥に問ひて音を知る）」（『本朝文粹』卷九「早春内宴侍仁寿殿同賦春娃無氣力」

- 応製詩序」(286)がある。これは、元慶九年正月に宮中で催された内宴の際の詩序の一節で、殿上を仙界になぞらえ、そこに登って半日、諸事を青鳥に尋ねては知ると述べるものであることから、この「青鳥」は殿上に仕えてその場についてよく知る者、すなわち藏人を指しているものと考えられる。このように「青鳥」が平安期において藏人を意味する語であったと考えられる(以上、『朝野群載』研究会(於慶應義塾大学、二〇一六年十月十五日)における佐藤道生氏の報告による)。
- (8) 池田利夫『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠 補訂版』(笠間書院、一九八八年)。
- (9) 『隋書』経籍志や『日本国見在書目録』、『旧唐書』経籍志などの記述から『搜神記』は本来三十卷であったと推測される。現行の二十巻本の巻二十に楊宝黄雀譚が見られ、これは楊宝の年齢を九歳とするほか黄雀が西王母の使者であることを記すなど『後漢書』楊震列伝李賢注、『藝文類聚』、『太平御覧』所引の『統齊諧記』の本文に近い。一方、敦煌写本(P.2524、S.78、S.2588、いずれも類書の断簡、「報恩」の項に記される)が『搜神記』として記す楊宝黄雀譚のうち、P.2524、S.2588の本文はまったくの同文で、楊宝の年齢を七歳とし、黄雀が西王母の使者であることを記さないなど、『蒙求』李瀚自注所引の本文に近い。ただし、S.2588の本文は、前半部分は他の敦煌写本とほぼ同じ(小異あり)だが、後半部分には黄衣童子が「我華岳山使者云々」と語る部分が加わっている。『搜神記』の楊宝黄雀譚については、中村友香「楊宝」条から見ると二十巻本『搜神記』の編輯(『アジア社会文化研究』第十五号、二〇一四年三月)を参照。
- (10) 当該句は、平仮名本との間に小異はあるが内容はほぼ同じ。平仮名本のほうが全体としてやや簡略。平仮名本の和歌を掲出しておく。「わがかどのわさ田のすずめたつこといなばにおけるつゆのしら玉」。なお、『蒙求和歌』については、前掲注(8)書など参照。
- (11) 池田利夫氏は、『蒙求』の「袁盎卻坐」(83)(=前漢の袁盎は文帝に対し、妾である慎夫人が皇后と同じように帝と同座するのを諫めた)の李瀚自注には存在しない、呂后と戚夫人の逸話が、『蒙求和歌』の「袁盎卻坐」(秋部)には「人疑」の語をきっかけとして長々と記されていること、そしてその逸話には『史記』には見えない話柄が少なからず含まれていることを指摘し、さらに『唐物語』第十七話の四皓の物語にも呂后と戚夫人の逸話が長々と記され、それが『蒙求和歌』の記述と同様に『史記』には見えない話柄を含み、その話柄が『蒙求和歌』のそれとある程度の共通性を持つことを指摘した。その上で池田氏は、『唐物語』の撰者や光行が、それぞれに見た『蒙求』の「袁盎卻坐」の箇所の上欄あるいは行間に、「注の注のような形で」、『史記』には記述されなかった呂后の伝が書き込まれていた可能性を指摘した(前掲注(8)書)。
- (12) 『唐物語』において、従来「竹取物語」からの影響を指摘されているのは、第八話の阿々の話(出典は『白氏文集』卷十「五」燕子三首并序)、第十二話の望夫石譚、第二十三話の瑜隠の妻の話であり、いずれの物語においても、一人の女性が

複数の男性たちから求婚される場面である。

(13) 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、二〇〇一年）。

(14) 前掲注（5）に同じ。

(15) 前掲注（5）有吉論文。同小峯論文。和田悦子『唐物語』における和様化について——花鳥風月を中心に——（『京都教育大学国文学会誌』第二十四・二十五号、一九九五年二月）。増田欣『中世文藝比較文学論考』第三章第二節「唐物語の時空」（汲古書院、二〇〇二年）ほか。

(16) 増田欣氏は、前掲注（15）書で、第十一話の蕭史と弄玉の昇仙譚においての「月」が、耽美的な情感の表出に効果的な役割を果たしているばかりではなく、「一夜のうちの時間的な推移を暗示する効果を生み出し」とし、こうした「月」の表現の仕方を「絵画的手法」あるいは「物語絵的手法」と呼んでいる。

(17) 前掲注（8）書。三田明弘『唐物語』の素材と主題——朗詠注との関わりから——（『説話文学研究』第三十九号、二〇〇四年六月）。

(18) 野口元大「解説——伝承から文学への飛躍——」（新潮日本古典集成『竹取物語』、新潮社、一九七九年）